

連詩の心理治療的效果

―物言わぬベンの事例の検討―

小山田 隆 明

文化創造学部文化創造学科

(二〇一四年九月十九日受理)

Psychotherapeutic Effects of Renshi Poem

―An Investigation of Silence Ben's Case―

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development

OYAMADA Takaki

(Received September 19, 2014)

要 旨

詩人チェイス (Chase, K.) が物言わぬ若者に詩を用いて会話を回復させた記録『Land of Stone: Breaking Silence through Poetry』を連詩療法の観点から分析し、その心理治療的效果を検討したものである。

はじめに、連詩とは何かを、次に連詩の「付け合い」を繰り返すという詩作形式には、鬱積した感情のカタルシスと認知的変容を生じさせる詩歌療法の効果に加えて、感情の共有・共感を促す作用があることを明らかにした。

六年間誰とも口を利かなかった若者は、毎週一回黙って互い

に「ないし二行の連詩を書くことで、二年の後、会話を取り戻した。その過程は、1. 「付け合い」のない詩を書く、2. 「付け合い」のある詩を書く、3. 詩の言葉が豊かになる、4. 詩に物語が生じる、5. 会話を回復する、の五つに分けることができた。

言葉を捨てることは、現実を捨てることを意味し、連詩の「付け合い」は言葉を回復させ、現実の世界への関わりを深めることになったと考えられた。詩の行を交互に「付け合う」という連詩療法が、他の人とのコミュニケーションに障害がある人たち、何らかの理由により会話を拒否している人たちの治療・回

復のための方法になる可能性を示した。

〈キー・ワード〉詩 連詩療法 会話障害 心理治療的效果

はじめに

これまで詩を書き、詩を読むことによる心理治療的效果は、鬱積した感情のカタルシスと認知的変容にあることを指摘してきた。同時に、詩の詩作形式により、心理治療的效果の異なることも示唆してきた(小山田2012, 2014)。本論文は、詩人チェイス(Chase, K.)が物言わぬ若者ベン(Ben)に連詩を用いて会話を回復させた記録『Land of Stone: Breaking Silence through Poetry』(石の大地—沈黙を解き放つ詩2007)を連詩療法の観点から検討したものである。そして何らかの理由で、他の人とのコミュニケーションに障害が生じている人たちの治療・回復への手掛かりを得ることを意図した。

1. 連詩とは何か

一九六九年に、オクタヴィオ・パス(Octavio Paz)らメキシコ、フランス、イタリア、イギリスの四人の詩人がパリに集まり、日本の伝統的な連歌の詩作形式に倣ってそれぞれの言語でソネット形式の詩を書いている。その詩集『Renga: A Chain of Poems』(連歌—詩の鎖1972)は、クロッペンシュタイン(Kropfenstein, E., 1987)によれば、四人の詩人の書いた詩の組み合わせと共同作業的性格ゆえに、ヨーロッパにおける最初の連詩(連鎖)の詩集であると言っている。一九七九年にアラスカで開催された詩人の集会で出会ったスタフオードとベル(Stafford, W. & Bell, M., 1983)は、互いの詩を

(二二八)

その地では直接に、その後は手紙で交換して、詩集『セグエー応答する詩』(Segues: A Correspondence in Poetry)を作っている。この詩集は、数少ない連詩集であることをセグエーという名前が示している。セグエーとは、音楽の演奏において前後の楽章の緊密な関係を示す用語だからである。

複数の人が共同してひとつの詩(現代詩)を作る詩作形式を連詩(Renshi)と呼んだのは、大岡信と現代詩誌『権』の同人たち(1979)であった。大岡(1987)によれば、連詩は日本の古典的な共同詩作の詩である連歌や連句からヒントを得たもので、「詩の作者同士の間で、生き生きとした対話」を求めるといふ連歌・連句の精神を受け継ぐものであるという。

連詩という用語は、大岡らと欧米の詩人たちにより連詩が試みられ、その連詩集が出版されてから(大岡他1985, 1987, 1988)、欧米の詩人の間で知られるようになってきたが、詩歌療法の研究者には現在も全く知られていない。詩歌療法における共同制作詩コラボレイティブ・ポエム(collaborative poem)は、複数の人が共同してひとつの詩を作るという詩作形式に関しては連詩と同じである。

しかし、日本の伝統的な詩型である連歌や連句も共同制作詩であり、オクタヴィオ・パスらの詩集『連歌』のように、連詩を連歌と混同しないためにもコラボレイティブ・ポエムを連歌や連句と概念的にも用語上も区別する必要がある。そこで、詩歌療法におけるコラボレイティブ・ポエムに連詩という訳語を用いることにした。連詩は、詩作の理念においてひとつの独自の詩型を意味し、コラボレイティブ・ポエムは連詩の概念に含まれるゆえに、連詩という訳語を用いることは適切であると考える。

2. 連詩療法

連詩は詩作の理念において連歌・連句の精神を受け継ぎ、詩の作者の間の生き生きとした対話を求めるものという大岡(1987)の主張は、連詩療法に理論的な根拠を与えるものと考えられる。連詩を行う者は、互いに詩の行の「付け合い」を繰り返すことによって、自分の思いや感情が他の人に伝わり、他の人の思いや感情が自分に伝わることで、互いの思いや感情を共有するようになる。この詩作形式の「付け合い」そのものが対話・会話(コミュニケーション)であり、連詩は書き言葉による会話、書字会話(ライティング・コミュニケーション)とすることが出来る。

このような連詩を心理療法として用いたのが連詩療法である。大岡(1987)は、連詩を「もっと体系的な技術に焼き直すことができれば、連詩の制作はある種の精神療法の技法としても応用できるはずだと思われる」と言っている。『權』の同人である小池昌代(2004)も、実作体験から連詩には集団的な治療の意味合いがあるような気がすると言い、いずれも連詩療法という用語は用いていないが、連詩には心理治療の効果のあることを示唆している。

詩を作り、あるいは詩を読むことにより、鬱積した感情のカタルシス(浄化・解放)と認知的変容を生じさせようとする詩歌療法の特徴に加えて、連詩療法には「付け合い」という詩作形式から生じる感情の共有・共感を促す作用がある。そのため連詩療法は、コミュニケーションや人間関係に障害を持つ人たちの治療に効果的な方法と考えられる。

これまでで連詩療法(Renshi therapy)という表題の研究報告はない

が、連詩・コラボレイティブ・ポエムを用いた研究は報告されている。マツアとプレスコット(Mazza, N., & Prescott, B. U., 1981)は、コミュニケーションに障害を生じている四組の男女のカップルへ適用して互いの意思の疎通が改善されたことを、チェイス(1989)やヨシム(Yochim, K., 1994)は、精神科病棟の慢性期の患者へ適用して患者間の会話が多くなったことを報告している。プラッセ(Plasse, B. R., 1995)は、麻薬中毒患者の母親へ適用し、親子関係の修復と母親の治療・回復への意欲を高めることができたとしている。

これらの研究報告は、いずれも集団で行ったものであり、連詩療法の治療的効果をより明確にするためには、一人の対象者に適用した事例の検討が必要である。チェイスがベンと行った連詩・コラボレイティブ・ポエムの詳細な記録『石の大地』は、連詩の心理治療の効果の検討に適切な事例であると考えられる。

3. 物言わぬ若者ベン

チェイスは、六年間誰とも口を利かず、ときどき家族に暴力を振るうという理由で、精神病院に送られてきたひとりの若者ベンに出会った。どんな問いかけにも「イエス」(Yes)、「ノー」(no)、「問題ない」(everything is fine)としか言わないこの若者は、通り過ぎるチェイスに何の注意も払わず、閉鎖病棟のナース・ステーションに通じるホールに立って壁を凝視していた。チェイスは、ベンの容貌を次のように記述している。ベンは、背が高く、痩せた体つきをしており、短く刈り込まれた黒い髪、大きな鷲鼻と口をしており、仕立てのよいYシャツと漂白した青いジーンズ、飾りのない白のス

ニーカーを履いていた。あるとき、医師の一人は、ベンのスフィンクスのような容貌、鋭い黒い目、威厳、寡黙、それらはまるで聖者のように信念の純粹さを現しているように見えると言った。

チェイスによれば、ベンは、学校に通っていたとき、成績も優秀で、絵や音楽が好きで、陸上競技の選手としていくつものトロフィーを得ていた。中学生のときドラッグを覚え、高校生になって余りにもお喋りでクラスの秩序を乱すという理由で退学させられた。その頃、何らかの理由で、話すことを止めてしまった。

最初に精神科の病院に入れられたのは二四歳のときであった。自閉症と診断され、ベンは言葉を捨ててしまった。後で分かったことであるが、親しく付き合っていた友人が突然死んだ。なぜ死んだのか分からないが(ドラッグの過剰服用かもしれない)、それ以来、友だちが訪ねて来ても会おうとせず、そして誰も来なくなった。ベンは何も話さなくなった。ただ、TVの気象情報の画面をじつとながめるようになった。ベンの沈黙に関係があるか分からないが、両親はホロコーストで生き残った子どもで、戦時中の体験をこの若者に何も話していない。

ベンは、「イエス」、「ノー」、「問題ない」としか言わないので、自閉症や緘黙症が疑われるが、DSM-5の診断基準に照らして自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder) や選択性(場面)緘黙 (Selective Mutism) とは考え難い。確かに他の人との会話が著しく少ないという社会関係の障害は認められるが、青年期の中頃までこのような障害はなく、診断基準の幼児期の早い時期の発症や反復的常同的行動はみられないゆえ、自閉症スペクトラム障害とは考えられない。

ベンは一日中ほとんど何も話さないが、医師や看護師の問いかけには強い緊張をみせながらも、「イエス」、「ノー」、「問題ない」と答えることが出来る。それゆえ、話すことが期待されるような状況において、話すことができないという選択性(場面)緘黙とも考えられない。ベンが話さないのは、話すことが出来ないからではなく、何も「話したくない」という意志の現れであると考えられる。人は辛い体験をした後に、何も話そうとしないことがある。そのような人たちの中には心的外傷体験(トラウマ)を癒すことが出来ず、ときどきパニックになる。ベンの理由のない暴力はその現れであったのかも知れない。

4. 連詩療法の適用—会話回復までの過程

チェイスは、毎週一回黙って連詩を書き、ベんに話すことを強いなかった。二年の後、ベンは会話を取り戻して退院した。物言わぬベンが書字会話を経て音声会話(スピーチ・コミュニケーション)を回復するまでの過程は、次のように分けることができる。(1)「付け合い」のない詩を書く、(2)「付け合い」のある詩を書く、(3)詩の言葉が豊かになる、(4)詩に物語が生じる、(5)会話を回復する。

「付け合い」は、連詩の基本的な要素であり、連詩の詩作に欠くことが出来ないが、チェイスの記録には「付け合い」を意味する用語はみられない。また、この記録には、医学的処置に関する記述はなく、詩や心理療法に関係する文献も引用されていない。

(1) 「付け合い」のない詩を書く

チェイスが「こんにちは。私はカレン・チェイス。ここでみんなと詩を書いているの。あなたもやってみない」と話しかけたとき、ベンは壁をじつと見つめたまま、「イエス」と言ったのには驚いた。翌週、チェイスは、ベンと向かい合って座ったテーブルの上に石をひとつ置いた。前の週にベンに会ったとき、ベンが物言わぬ石のよう感じられたので石を持ってきた。ベンはそれをかなり長い時間見つめていた。チェイスは、クリップ・ボードに挟んだ紙に「わたしは石」と書き、ベンに渡した。互いにひと言も言葉を交わすことなく、詩の一行を書いている紙をやり取りした。

その時、チェイスは、ベンに心の世界ではなく外の世界を詩に書くと言ひ、個人的な事柄に触れることを避けた。しかし、チェイスが「わたしは石」と書いたとき、ベンは自分を石に投影し、自分と沈黙の隠喩(メタファー)として用いていたことに気付いたという。最初の一行を「わたしは石」としたのは詩人のひらめきであった。その詩は、次のようであった(Kはチェイス、Bはベン)。

わたしは石 (K)

石はよい (B)

それは野原にある (K)

石は決して悩まない (B)

決して夢をみない (K)

石はいつもやって来る (B)

どんな天気の時も (K)

あらゆるものは石と一緒にいつも幸せ (B)

ブリザード(吹雪)のときも (K)

あらゆるものは石と一緒にいつもオーケー (B)

チェイスはベンの書いた詩の行に「付け合い」を意識して詩を書いているが、ベンの詩にはチェイスの詩の行と繋がりも重なりも見られず、「付け合い」が認められない。翌週、タイプした詩をベンに渡すと、黙って読んだ。「詩のコピーが欲しい？」と尋ねると、返事はいつものように「ノー」であった。

チェイスは、詩の最初の一行を変えることでベンの関心を外の世界に向けようとした。それは、表現を豊かにするためであって、認知的変容を生じさせるためではなかった。それにしても、何がベンに連詩を書き続けさせているのか、チェイスには分からなかった。

(2) 「付け合い」のある詩を書く

ベンと連詩を書くようになって四ヶ月が過ぎた頃、チェイスは陶器の破片をベンに見せながら、「今年、春先に、庭の土を掘り返していたら、この割れた陶器の破片を見つけたの。それは私が好きだった器(うつわ)。あなたもこれに興味を持つと思ったの」と言った。

これは、チェイスが個人的なことを話した最初であり、ベンが詩に「感覚的な言葉(次の詩の「古いように」「滑らかな」「肌ざわり」「デリケートに」など)を用いた最初であった。そして、ベンの詩の行は、チェイスの詩の行のイメージと繋がり、「付け合い」が認められるようになった。

破片はとても古いように見える (B)

誰かのキッチンの器の (K)

それはとても滑らかな肌ざわり (B)

滑らかに磨かれ、どこにも凹凸がない

遠くから (K)

それはデリケートに見える (B)

ベンは、相変わらずひと言も話すことなく詩の一行を書いていたが、書く前に詩を最初の行から読んでいることに、チェイスは気付いた。そして、あるとき、ベンは、詩の最後の行を書きたいという合図をした。ベンは、「付け合い」をはっきりと意識して詩の行を書いていることが認められた。

チェイスは、書かれた詩をゆっくりと声に出して読んだ。それを聞いて、ベンの緊張は弛み、眼は生気を取り戻したように思われたと言っている。それから数ヶ月後、誰が最初の一行を書くかこたわらなくなった。

(3) 詩の言葉が豊かになる

チェイスは、石、木の葉、陶器のかけらなどを詩を書くために用いた後、色 (カラー) を詩の題材にしている。詩の最初の一行に色を用いることによって、目に見える外の世界へ注意を向けさせ、同時に色には何らかの感情を伴うゆえに、詩の言葉がますます豊かになると考えた。次の詩は、色を題材にした最初の詩である。

色を心に描く (K)

ブルーは非常に暗い (B)

光が当たらないとき (K)

キイロはとてもすばらしい (B)

タクシーに、カンバスに (K)

アカは危険な色 (B)

チェイスは、キイロを具体的な物 (タクシーやカンバス) に結びつけ、ベンの気持ちを落ち着かせようとした。しかし、ベンは、キイロではなく「アカ」について感覚的で感情的な言葉で詩の行を書き続けた。「アカは危険な色」「あらゆるものを、照らし出す」「アカはとても速く伝わる／いつも動いている／そして激しい」。

その一方で、ベンの表現は、「あらゆるものを、興奮させる／アカがそこにあるとき」のように、言葉の位置を変えることで、より印象的なものになり、「色はあるときは非常に暗い」など表現に陰影が生じ豊かになった。これまで「あらゆるもの」という言葉は、「わたしは石」の詩にみられるように「石」にのみ結び付いていたが、「あらゆるものを／明るく照らす」のように「石」から離れ、ベンの外の世界に対する認知に変化が生じはじめた。

しかし、次の週、ブルーについての詩では、色への恐怖が戻って来て、「それが部屋の中にあるのは恐ろしい／なぜならそれはとてもカラフルだから」と書き、「部屋はとても灰色」と書いた。色彩のないモノトーンは心を落ち着かせるが、カラフルな色はベンの心を攪乱させるゆえに恐ろしいと言っている。

(4) 詩に物語が生じる

ベンの詩の言葉は、ますます多くなり、表現は一層豊かになった。

ベンは、太陽と雪についての物語を始めた。物語（ストーリー）はシンプルであった。太陽は姿を消す、寒く、暗い雪模様になる。太陽が再び現れる、しかし寒いままである。

夕暮れ 太陽は

沈みゆく あらゆるものは

冷たくなる (B) 長い夜を

通して (K)

すっかり霜で覆われている (B)

白い氷がガラスの縁を被っている (K)

空はとても暗い

雪が降っている ひと晩中 (B)

静寂が大地に降り注ぐ (K)

とても寒い天気 その夜は (B)

そして それは続く (K)

朝の光は まだ

寒さを感じる (B)

この後、ベンは、繰り返しブリザード(雪嵐)を詩の題材とした。

そしてその情景を詩に書いた。詩の中で、ベンは「ブリザードは恐ろしい」「あらゆるものを凍らせる」と書き、チェイスが「ブリザードはジブシーの一团をとらえた」と書いたとき、「それから逃れようとした」「みんなすっかり冷たくなった」と続けたが、最後は「しかし困ったことは何も起こらなかった」と否定した。

現在形でのみ書かれていたベンの詩に過去形が、そして未来形の

表現が現れ、詩はより一層物語らしくなった。ベンがブリザードの詩の物語を書き始めたとき、チェイスはブリザードという隠喩(メタファー)を用いて、ベンが自分の物語をゆつくりと語り始めたと思った。

詩人であるチェイスは、これまで表現の豊かさを求め、ベンの人生を知ろうとしなかった。関心さえ持たなかった。ベンも自分の生い立ちについて話すことも、書くこともなかった。しかし、いくつもの詩の中で繰り返しされるブリザードの描写から、ベンがいかに長い間、閉ざされた自分の内面のみを見ていたか、ベンが何も話さなくなったときから、なぜTVの気象情報の画面を凝視していたのか、そして自分の物語を語る相手を得るのに長い時間かかったか、チェイスには分かったという。

ブリザードの詩は、ベンの心の世界の表出と考えられ、この詩を繰り返し書くことで、閉ざされていた心が少しずつ開かれ、鬱積した感情も徐々に解放(カタルシス)されていったと考えられる。しかし、この詩から、何が沈黙の原因であったのか読み取ることは出来なかった。

(5) 会話を回復する

一年が過ぎたある日、チェイスが詩の一行に「季節外れに暖かい」と書き、声に出して読んだとき、ベンが「暖かいと言ったのには何か理由があるの?」と言ったのには驚いた。「イエス」「ノー」「問題ない」としか言わなかったベンが、紙に書かれた詩の最初の行をみて声を発し、次に言葉を声に出した。それから後、ベンは徐々に自分の言葉を発するようになった。書き終えたばかりの詩を、チェ

イスが声に出して読むのを聞いていたベンは、「この詩が好きだ」と言い、そして長いこと無言であったが、「詩は互いに連なるように進んでいる」と言った。

ベンは、詩の「付け合い」を繰り返すことで、会話への意欲を回復し、沈黙の呪縛から解放されつつあった。そして同じ病棟の患者と少しずつ会話を交わすようになった。ベンは、遂に音声会話の世界に戻ってきた。

5. 連詩の心理治療的な効果

詩人であるチェイスの目的は、「イエス」「ノー」「問題ない」としか言わないベンに会話を取り戻すことで、沈黙の原因を明らかにすることではなかった。チェイスは、心の世界ではなく外の世界を詩の一行に書こうと言い、毎週一回黙って互いに詩の一行を、多くても三行の「付け合い」を繰り返した。二年間に二〇〇の連詩を書いたが、どの連詩も一〇行ほどで、三〇行を超えるものはなかった。チェイスが表現の豊かさを求めて、向かい合って座ったテーブルの上に石、木の葉、陶器の破片などいろいろな物を置き、それらを題材として詩の最初の一行を書いたことは、ベンの閉ざされた認知的世界に変化を生じさせようとした試みとみることが出来る。

最初の詩「わたしは石」でも、チェイスは「付け合い」を意識して詩の行を書いているが、ベンには「付け合い」の意識はみられず、文字による会話、書字会話（ライティング・コミュニケーション）は認められない。しかし、言葉を発することなく互いに詩の一行を書くことによって、ベンの「会話の恐怖」は少しずつ和らげられ、安心感を与えていたことは、連詩が続けられていたことから明らかである。

かである。

ベンに詩の行の「付け合い」を意識させたのは、チェイスが詩の行を書く度に声に出して読んでいたことが大きく影響していたと考えられる。音声はその人の感情や思いを直接伝えるからである。そして、ベンが自分の詩の行を書く前に、詩を最初から読んでいる様子が見られるようになった。このとき、チェイスとベンの間に文字による会話、書字会話が生じた。これは、連詩という詩作形式そのものの効果であるが、「付け合う」人びとに共感する心がなければ効果の得られないことは他の心理療法と同じである。

書字会話であっても、会話が可能になったゆえに、詩の題材が変われば、それに応じて詩の言葉も表現も変化し、言葉はより豊かになった。しかし、チェイスは、ベンの関心をさらに外の世界に向けようとして詩の題材に「色（カラー）」を用いたとき、ベンに激しい感情を表出させてしまった。そして、ベンの注意を具体的な事物（タクシーやカンバス）へ戻そうとしたが出来なかった。「アカ（赤）」のような激しい感情を誘発しやすい色の使用や出現には、特に注意する必要があることを「色（カラー）の詩」は示した。この事実は、連詩の危険性をも示唆している。詩の題材の選び方によっては、状態を悪化させることになるからである。

連詩療法において、「付け合い」の意識の有無は、具体的にはたとえ短くても詩の中に「物語（ストーリー）」が生じているか否かによって知ることが出来る。なぜなら、二人が思いや感情を「付け合い」の中で共有しなければ、詩の中に「物語」が生まれないからである。現在形でのみ書かれていたベンの詩に過去形が、そして未来形の表現が現れ、詩はより一層物語らしくなった。それまで「わ

たしは石」の詩にみられるように、ベンは止まった時間の中にあって、ただひとつの時制、現在しかなかったが、詩に物語が生じたことで時間的展望が広がったと考えられる。そして出来事の時間的な位置づけは、それらの間の類似性や因果関係に気づかせることになる。

どんな問いかけにも「イエス」「ノー」「問題ない」としか答えなかったのは、言葉を捨てることで現実を捨てることであったと考えられる。それゆえ、連詩の「付け合い」を繰り返すことで言葉を回復しつつあったことは、現実の世界への関わりを深めつつあったことを意味した。しかし、現実の世界を受け容れたわけではなかった。ベンは、父親が問題飲酒者で酔っぱらって病院に来たことも、病棟のバスルームで患者の自殺未遂を目撃したことも、目にした出来事をすべて否定した。そして、「ブリザードの詩」の中でも、最後の一行で「しかし困ったことは何も起こらなかった」と、出来事を否定しているからである。

「ブリザードの詩」は、ベンの心の世界を隠喩（メタファー）で表現したものと考えられるが、この詩から何が沈黙の原因であったのか知ることは出来ない。たとえその原因が明らかにされ、意識化されたとしても、それにより音声会話（スピーチ・コミュニケーション）の回復が必ず期待できるとは限らない。なぜなら、沈黙は、その原因となったものの二次的な現象であるが、長い間に沈黙それ自体が適応行動化してしまう場合もあり、また最初の原因が変質して、自分にとっても何が原因か分からない場合もあるからである。しかしながら、ベンが会話への意欲を示すようになったことから、連詩の「付け合い」がベンの鬱積した感情を浄化・解放（カタルシス）

させ、「会話の恐怖」についての認知に変化を生じさせたことは確かである。

連詩を書くことの影響は、ベンだけでなく、チェイスにも認められた。チェイスは、子どもの頃小児麻痺に罹りギブスを着けていたため、体が自由にならず、長い時間歩くことが出来なかった。その「窮屈さ」は、ベンの硬直したような「窮屈さ」に似ていると思いい、ベンに親しみを感じたと言う。また、チェイスは、その頃母親を亡くし、心を閉ざしていた時期があった。この「閉ざされた自分」という体験は、ベンの体験と似ていることに後になって気付いたとも言っている。

このような共通な体験がベンとチェイスに連詩を続けさせたと考えられる。大岡(2011)によれば、連詩の詩作者は詩の行を互いに「付け合う」ことにより、他の人を知ると同時に自分自身に気付くようになると言いい、これは「付け合う」という連詩に特徴的な効果であると考えられる。

ベンの事例では、治療者が連詩の詩の行の「付け合い」を続けることで、書字会話を通して音声会話の回復が図られ、詩の題材にさまざまな物を用いることで、外の世界に関心を向けさせ、詩の言葉を豊かにすることで現実の世界への関わりを深めることができた。それゆえ、詩の行を交互に「付け合う」という連詩療法は、他の人とのコミュニケーションに障害がある人たち、何らかの理由により会話を拒否している人たち、例えば選択性（場面）緘黙症が原因となつてその後の会話に困難を感じ、あるいは拒否している人たちの治療・回復のための方法になる可能性を示した。

- 註1 この詩集には、ロイ (Roy, C.) による日本における連歌の歴史、パス (Par, O.) による詩作上の意味、ルーボー (Roubaud, J.) による連歌の詩作形式、トムリンソン (Tomlinson, C.) による感想と英語への翻訳がある。最初の版(1971)は Gallimard 社から出版された。
- 註2 外国の詩人との連詩は、日本語に堪能で日本文学に造詣の深いその国の人とその国の言語に精通している日本人の協力による翻訳を介して行われる。
- 註3 大岡 (1991) は、連詩の詩作の理念について、『連詩の愉しみ』の中で次のように説明している。現代詩の詩人が通常行っている詩の作り方とは大きく異なり、連詩は「原則的に同じ室内で、同じテーブルを囲んで行い」、「同じ場所、同じ時という条件は一義的に重要」(p.19-20) であると述べている。そして連詩は「形式それ自体の必然によって、他者と創造的相互干渉の関係」(p.36) を持つとしている。さらに、「連詩の試みとは、詩句の付け合を通じて、他者との、いや自分自身とさえもの付け合(つきあい)を刷新する機縁となるかもしれないものなのです」と言っている。
- 註4 詩歌療法が詩を作り、詩を読むことにより、鬱積した感情のカタルシス(浄化・解放)と認知的変容を生じさせようとするものであることは、『詩歌療法—詩・連詩・俳句による心理療法』(小山田 2012) に詳しく論じている。
- 註5 「付け合い」の心理過程については、寺田寅彦『連句雑俎』(1961) の「連句の心理と夢の心理」に詳しく。
- 註6 チェイス (1989) がコラボレイティブ・ポエムを考えたのは、慢性期の精神病患者の失った言葉と表現を取り戻すために、詩の最初の一行をチェイスが書き、次の一行を患者が書く「詩のワークショップ」を始めたときであった。交互に詩の行を書き終えたとき、患者の一人が、「これが私の最初のコラボレイション」と言った。こ

のとき、コラボレイティブ・ポエムのアイデアが明確になったという。

- 註7 星野 (2001) は、連詩と同じ「付け合い」を詩作形式とする連詩療法的に患者の句(詩)を読むことの効果を、次のように指摘している。①句を音読することにより、日常の対話では感じることのできなかったニュアンスが伝えられる、②句の言葉の響きやリズムから、それまで気づかなかったものと自分の心との繋がりに気づかせる、③言葉のリズムや響きを通して外界への共感性と愛おしむ気持ちが強められる。

- 註8 連詩における物語性は、連句における「句い付け」とは異なる。連句においては、物語性は「べた付け」のように避けるべきものとされているが、大岡は『權・連詩』(1979) の中で連詩にあっては必然的に生じるものであると言っている。

引用文献

- Chase, K. About collaborative poetry writing, *Journal of Poetry Therapy*, 3 (2), 97-105, 1989.
- Chase, K. Land of Stone: Breaking silence through poetry. Wayne State. Uni. Press. 2007.
- DSM-5 Desk Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-5, American Psychiatric Publishing, 2013.
- 権同人『權・連詩』思潮社 1979。
- 星野恵則 俳句・連句療法(総論)臨床精神医学 増刊号 115-119, 2001.
- Kopfenstein, E. (松下たを子訳) 現代の連詩 大岡他『ヴァンゼー連詩』70-88, 岩波書店 1987。
- 小池昌代 座談二 大岡信編『連詩 闇にひびく光』p.144, 岩波書店 2004.
- Mazza, N., & Prescott, B. U. Poetry: An ancillary technique in couples group

- therapy, *American Journal of Family Therapy*, 9, 53-57, 1981.
- 大岡信・T. フッツシモンズ (Fitzsimmons, T.) 『揺れる鏡の夜明け』岩波書店 1982. (外国語版 *A Plat of Mirrors—Eight Major Poets of Modern Japan*, KATYDID Books, Oakland University, MI, 1987.)
- 大岡信・K. キウス・川崎洋・G. フェスパー 『ヴァンゼー連詩』岩波書店 1987. (外国語版 *Japanisch—Deutsches Tettengedicht, Sprache in Technischen, Zeitalter: Literarischen Colloquiums Berlin*, 1985)
- 大岡信 『ヨーロッパで連詩を巻く』岩波書店 1987.
- 大岡信・谷川俊太郎・H. C. アルトマン・O. パステイオール 『ファザーネン通りの縄(なは)し』岩波書店 1989. (外国語版 *Vier Schamiere mit Zunge, Klaus G. Renner, München*, 1988)
- 大岡信 『連詩の愉しみ』岩波新書 岩波書店 1991.
- 大岡信編 『連詩 闇にひびく光』岩波書店 2004.
- 小山田隆明 『詩歌療法—詩・連詩・俳句・連句による心理療法』新曜社 2012.
- 小山田隆明 詩の心理治療的効果—ジョン・スチアート・ミルの事例の検討 岐阜女子大学紀要 43, 23-33, 2014.
- Paz, O., Roubaud, J., Sanguineti, E., Tomlinson, C. *Renga: A Chain of Poems* George Braziller, Inc. 1972.
- Plasse, B. R., Poetry therapy in parenting group for recovering addicts. *Journal of Poetry Therapy*, 8, 135-142, 1995.
- Stafford, W. & Bell, M. *Segues—A Correspondence in Poetry*, Bostone; David R. Godine, 1983.
- 寺田寅彦 『連句雑俎』寺田寅彦全集第十二巻 120-256, 岩波書店 1961.
- Yochim, K., The collaborative poem and impatient group therapy: A brief report. *Journal of Poetry Therapy*, 7, 145-149, 1994.

